

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク

小 林 裕 季

1. はじめに

近江は戦国時代の城郭に、いち早く石垣が導入された地域のひとつであり、それらの城郭に先行して寺院に石垣が築かれている事例が多く存在する。また近年、城郭に用いられる石垣の技術は、寺院由来の技術であったことが再確認されてきたところである（中井 2019）。こうした寺院、特に山中に築かれた山寺では、城郭調査の縄張り図の手法を援用して、遺構の分布状況や配置などについて地道な資料化が進められてきている。しかし、石垣といった細部の遺構にまで資料化がなされていることは極めて少ない状況である。

その一方で、常時管理されていない、既に遺跡となっている山寺のなかには、樹木の生育や風雨による浸食のため、石垣が孕んでいるものも多く、近い将来に崩落してしまうことが懸念される。また、近年の台風等による倒木で石垣が崩壊しているケースがある。実際に筆者が訪れた山寺で、かつて良好に石垣が残存していた箇所倒木が直撃したことにより、この数年の間で石垣が失われた部分がある。

本稿では、比良山系の石垣を有する山寺（図1）から、残存状況が比較的良好で、且つ代表的と考えられる石垣箇所を抽出したものを資料化して提示し、局所的なものではあるが記録として残したい。加えて石垣とそれらを包摂する山寺が果たした役割や性格について考察を行いたい。

2. 資料化の方法

資料の抽出方針

現地表面に露頭している石垣で、崩落等の少ない残存状況が良好な箇所を抽出して資料化を行った。また、多くの地点に石垣が築かれている場合は、代表的と考えられる箇所を選択した。

資料化の方法

本来ならば正確な測量調査に基づいて実測図を作成すべきであるが、一個人のみで石垣の精緻な測量を行うことは容易ではないことから、撮影した写真を元図として図面を作成した。

方法は、対象とする石垣に対して平行した連続写真を撮影し、その写真データを agisoft 社 photoscan を用いて合成・オルソ画像化した。また、現地において資料化の起終点とした石垣間の長さおよび高さを計測した。photoscan により合成・オルソ化された画像は、草木や土なども石垣の構成石材と誤認している可能性があるため、合成した画像を下図として石材の外形線や稜線などを判断して線画化した。図化後、再度現地にて石垣の確認および修正を行っ

た。よって、精緻な実測図ではないものの、石垣の現況資料としての精度に耐え得る図面と考えている。

なお、後述する太山寺の石垣については、任意の水準高を設定し、それに基づいて手測りによる実測図を作成した。

3. 各山寺の概要と石垣の状況

(1) 長法寺（図2）(1)

長法寺の概要

長法寺は高島市鶴川に所在し、比良山系の北東端部付近に位置する長宝寺山と呼ばれる丘陵上の谷部に築かれる。9世紀半ば頃には創建されていたとみられ、弘安3年(1280)の裏書をもつ『近江国比良荘絵図』には、滋賀郡と高島郡の郡境に位置する滋賀郡側の寺院として描かれている。13世紀初頭から15世紀初頭にかけては、長法寺に施入された大般若経のやりとりについて文献史料上にしばしば記載がみられ、永享4年(1432)には延暦寺の円明坊兼宗が方丈職を務めたとする。15世紀中頃に最盛期を迎えたと推測されるが、文明3年(1471)に出された売券を最後に消息が不明となる。『高島郡誌』や『近江国滋賀郡誌』『鶴川村誌』には織田信長によって焼亡されたと伝承するが、遺跡に残る石材には焼けた痕跡は認められず、城郭化や後世の寺院遺構の改変といった様子がないことから、15世紀後半頃には衰退傾向にあり、信長の登場以前に廃絶していったと考えられる。

長法寺の石垣（図3・写真2～5）

石垣は最奥に位置する本堂跡から延びる直線道路と、西側に並行するもう一本の直線道路に面する部分を主として築かれる。これらの直線道路沿いには方形を基調として区画された寺坊跡が築かれ、斜面を切り盛りして寺坊内の平坦面を形成している部分の数か所で石垣が築かれる。なお、平坦面内に区画として敷設されたと考えられる石積みや石塁状の遺構も散見される。石材はいずれも比良山系で豊富に産出される花崗岩とみられる。築石は直方体を志向するものが主体となるが、研りなどの特別な加工を施していない自然石である(2)。また、間詰に小ぶりの自然石を詰めて噛み合わせている。積み方は概ね横目地を揃え、上下左右の築石の隙間を埋めるかたちで小ぶりの石材を挟んで積み上げているようである。裏込石や飼石の有無は露頭している部分のみの観察であるため不明である。

このうち、西側の直線道路沿いの2か所（石垣①・②）、本堂跡南西下方の寺坊跡の内側に1か所（石垣③）、本堂跡から延びる直線道路沿いの1か所（石垣④）の合計4か所の石垣を抽出した。以下に石垣①～④について述べる。

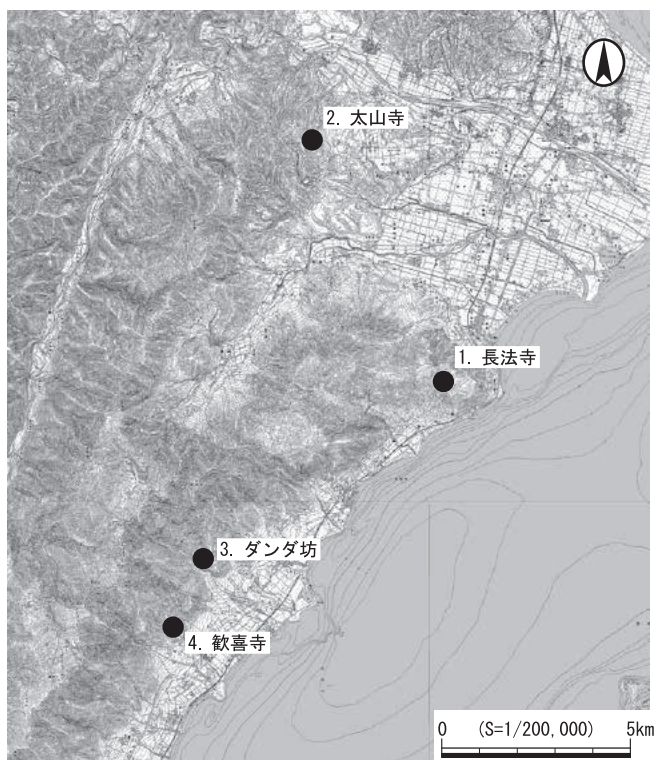


図1 比良山系の石垣を有する山寺

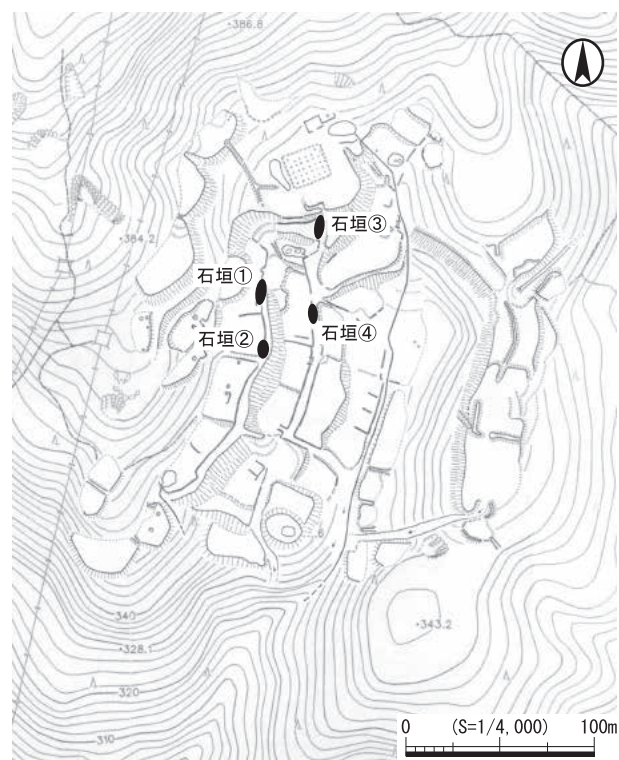
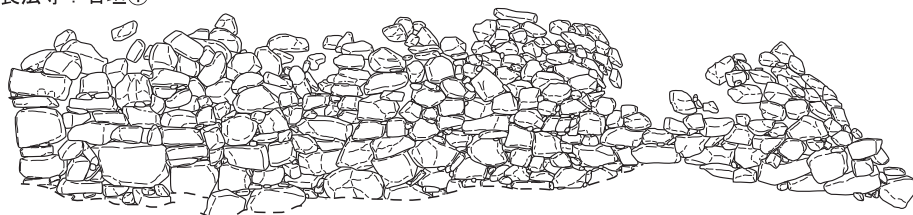


図2 長法寺 石垣位置図

長法寺：石垣①



長法寺：石垣②



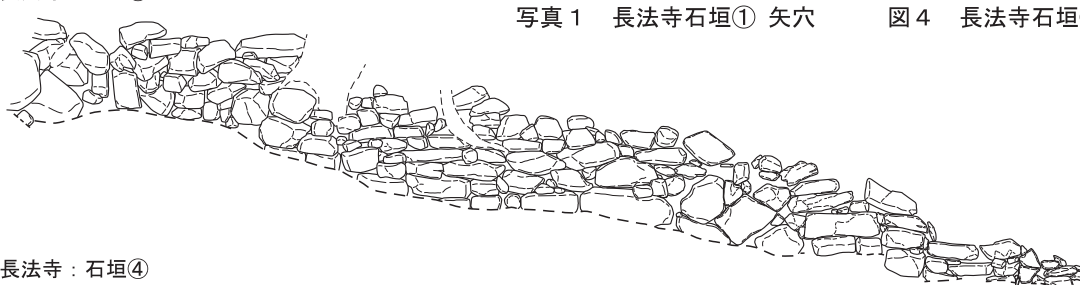
写真1 長法寺石垣① 矢穴



図4 長法寺石垣① 矢穴拓本

0 (S=1/6) 20cm

長法寺：石垣③



長法寺：石垣④



0 (S=1/100) 3m

図3 長法寺石垣略測図

石垣①は、南端部で寺坊跡の出入口となる石段が残り、隅角部を形成する。北端部は石垣上部が崩落しているが、下部は概ね残存しており石垣が途切れる。石垣の延長は約12.0m、高さは現況地表面から2.3m程度である。法勾配は持たず、ほぼ垂直に積み上げられる。南端隅角部付近の築石は一辺60cm程度のやや大ぶりの石材を多用していることに對し、中央部は一辺30～40cm程度の石材を主体としている。また、南端隅角部の上部に積まれる石材には、1石のみであるが矢穴痕が残る（図4・写真1）。この矢穴痕については後述する。

石垣②は、南端部に隅角部が残るが、北側は倒木により著しく崩落している。そのため、倒木までの約4.0m分を図化した。高さは現況地表面から1.8m程度で、ほぼ垂直に積み上げられる。南端隅角部は上部が樹木により大きく孕んでいる。築石は一辺40～80cm程度の直方体に近い石材を主体とし、横目地を揃えて整然と積み上げている印象を受ける。

石垣③は、本堂跡から延びる直線道路沿いに並ぶ寺坊跡の内側に築かれ、直線道路の足下にあたる。延長は約14.0mで、高さは石材が多く積まれている部分で1.0～1.5m程度である。石垣の天端石は傾斜する地形と概ね平行するが、石材は横目地を揃えながら、水平を志向して積み上げられている。下部の築石は長辺60～100cm程度の横長の直方体を呈する石材を主体とし、中～上部は下部のものより少し小ぶりの横長の石材の使用が目立つ。

石垣④は、本堂跡から延びる直線道路に面して築かれる。南北両端は崩落しているため、石垣の残存度の高い約11.6m分を図化した。高さは現況地表面から1.5～1.8m程度で、ほぼ垂直に石材を積み上げる。下部の築石は長辺90～120cm程度の横長の直方体に近い石材を主体とし、上部は下部の石材の形状により凹凸ができたその間ごとで、一辺50～60cm程度の石材を横目地を揃えながら積み上げたことが窺われる。

長法寺に残る石垣の特徴は、法勾配を持たずに石材をほぼ垂直に積み上げており、横目地を意識しながら隙間に間詰石を噛み合わせて構築していることである。石材については、直方体に近い形状に粗割した状態の自然石を用いて築石とし、間詰石は小ぶりの自然石を使用している。

もうひとつ特に注目しておきたいことは、石垣①の南端隅角部の上部に積まれる石材に矢穴痕が認められたことである（図4・写真1）。近接する位置で2つの矢穴が並んで残っており、矢穴口の長辺は約10～11cm、分割された短辺は約1cm程度、矢穴の深さは約5～6cmを測る。矢穴底は隅丸状を呈する。半裁状況にあり、連続する2穴のみの遺存であるため、評価は慎重を期する必要があるが、森岡・藤川氏の矢穴型式に関する研究成果を援用すると、「古Aタイプ」に相当すると考えられる（森岡・藤川2008）。「古Aタイプ」の矢穴は文明14年（1482）に着工年代が求められ

る、足利義政の東山山荘（東山殿）関連遺構での検出例が指標とされているが、通説のとおり長法寺が15世紀後半頃に衰退して廃絶したものとすれば、石垣系の矢穴としての初現期の事例となる可能性がある。今後の課題を提供する矢穴が残っている。

(2) 太山寺（図5）(3)

太山寺の概要

太山寺は高島市安曇川町田中に所在する。比良山系の北西端部付近に位置し、西方浄土の信仰対象とされる阿弥陀山を背後とする尾根筋の中腹に立地する。伝承によれば聖徳太子の創建と伝えられる。元弘元年（1331）および建武2年（1335）には田地の寄進に関する記載が文献史料上にみられるほか、『葛川明王院文書』には、中世において葛川明王院の頭役に入るなど、葛川修験の一道場として機能していたとされる。文明16年（1484）には寺坊の売券がみられ衰退傾向にあったと考えられ、慶長7年（1602）に作成された慶長検地絵図である『近江国高島郡田中郷絵図』には、小堂1宇と鳥居のある鎮守社のみが描かれる。完全に無住化したのは近世初頭と推測される。また、本堂跡背後の尾根上と中央部に位置する寺坊間には堀切を設け、本堂跡へ向かう参道を鉤の手状に屈曲させて虎口状にするなど、城郭遺構が部分的に築かれている。『高島郡誌』では信長の兵火により焼亡したとする。

太山寺の石垣（図6・写真6・7）

石垣は本堂跡から見て南東下方にある寺坊内に一部が露頭している（石垣②）。また、本堂基壇に一部で石材を積み上げており、本来ならば石積基壇とすべきであるが、本稿では比較の対象に石垣①として併せて記述する。チャート質の石材を使用し、一部に粗割されたと考えられる石材も用いるが、大半が自然石である。

石垣①は、太山寺の最奥に位置する本堂跡の基壇を形成している。本堂跡の前面にあたる南東部分を図化した。規模は延長約14.0m、高さは0.5m程度である。一辺50～100cmの大ぶりの石材を間隔を置いて設置し、その間に一辺40～50cm程度のやや小ぶりの石材を概ね2段積んでいる。築石に相当する部分は比較的平坦な面を選択して配置したとみられる。

石垣②は、斜面を削り出した寺坊跡の段差となる部分でL字状に築かれたものである。L字の短辺となる東西方向（石垣②-A）は、本石垣のある寺坊跡から上段の寺坊跡へと至るスロープ状の通路を兼ね、長辺になる南北方向（石垣②-B）の石垣天端は上段の寺坊跡の平坦面となる。南北方向に約12.0m、東西方向に約3.5mにわたって石材が確認されるが、一部が崩落し、土砂に覆われている部分が多い。高さは多く積み上げられている部分で1.0m程度である。露頭している石垣を観察すると、北端付近では長辺60～100cm程度の横長の直方体を呈する石材を下部に配置し、上部



写真2 長法寺石垣①



写真3 長法寺石垣②



写真4 長法寺石垣③



写真5 長法寺石垣④



図5 太山寺 石垣位置図

太山寺：石垣①(本堂基壇)

本堂に伴う礎石

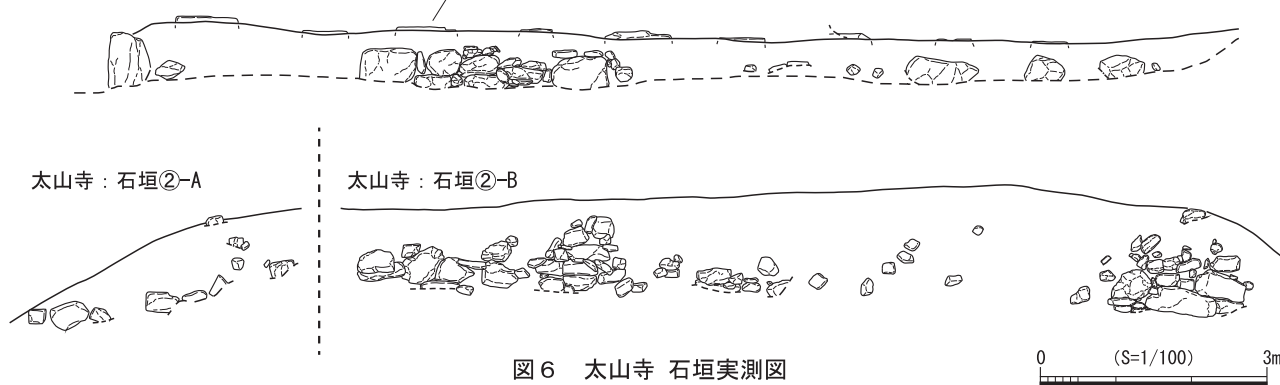


図6 太山寺 石垣実測図



写真6 太山寺石垣①(本堂基壇)



写真7 太山寺石垣②

は一辺 20～40cm 程度の石材を積み上げる。一方、屈曲部付近の南側では一辺 50cm 程度の石材を積み上げている。斜面を削り出した部分に設置していることから、やや緩やかな法勾配を持つ。

太山寺の石垣は、露頭している部分が少ないため詳細を把握し難く、先述した石垣以外に埋没している可能性はあるが、現況では一部にのみ石垣が認められる。また、チャート質の石材を使用しているためか、石材の規模や形状にもばらつきが大きいことが特徴付けられよう。

(3) ダンダ坊（図 7）（4）

ダンダ坊の概要

ダンダ坊は大津市北比良に所在し、釈迦岳と堂満岳に挟まれる尾根の傾斜変換点付近に立地する。ダンダ坊の沿革については不明な点が多いが、『近江国滋賀郡誌』『北比良村誌』によると、寛平 5 年（893）に僧済信が創立し、比叡山横川恵心院の別院であったとする。また、元亀 3 年（1572）に織田信長によって焼滅したとする。遺構は約 550m×約 150m もの広範囲に広がる。石垣や石塁、段差によって区画された寺坊跡となる平坦面が数多く残り、それぞれ通路で接続して複雑な平面構造となっている。比良山系の主要な山寺と同様に 15 世紀半ば頃を中心に築かれていたと推測される。

ダンダ坊の石垣（図 8・写真 8～11）

石垣は遺構が広がるほぼ全域で確認され、通路沿いや斜面を削り出して雛壇状に形成された段差部分を主として築かれる。石材は比良山系で豊富に産出される花崗岩とみられる。築石は直方体を志向し、平坦に近い面を前面とするものが主体となるが、大半が粗割されたのみの自然石と考えられる。間詰には小ぶりの自然石を詰めて噛み合わせている。積み方は概ね横目地を揃えることを意識しているようであるが、距離の長い石垣の場合はやや乱れる印象を受ける。裏込石や飼石の有無は露頭している部分のみの観察であるため不明である。

このうち、庭園遺構と考えられている北側最奥に位置する寺坊跡の 2 か所（石垣①・②）、遺跡南側の直線道路沿いに並ぶ寺坊跡を画する通路部分に 1 か所（石垣③）、西側にある本堂跡と推測されている平坦面を形成する部分（石垣④）の合計 4 か所の石垣を抽出した。以下に石垣①～④について述べる。

石垣①は、庭園遺構へと至る出入口となる部分で、北西で角となって直角に折れ、対面する東側は土塁によって平面方形の空間となることから櫓形虎口とする説のある石垣である。基底部となる石垣の長さは、南北方向（石垣① - A）に約 2.5m、東西方向（石垣① - B）に約 3.9m が残る。いずれも天端石は崩落しているとみられるが、石垣① - B の東側は出入口となるため、基底部石材の東端までは上部の石垣が延伸しないものと推測される。角となる北西部

の高さは約 1.4m である。基底部の石材は、長辺 60～140 cm 程度の横長に近い直方体を呈する大きな石材を据え、その上に長辺 30～80 cm 程度の同じく横長に近い石材を、横目地を揃えて積み上げる。明確な法勾配は持たず、ほぼ垂直に近い。築石前面は平坦な面が揃い、凹凸が少なく整然と積まれている。

石垣②は、庭園遺構から雛壇状に連なる寺坊跡の段差部分に築かれたものである。本来は庭園遺構の南側全体に石垣が築かれていたとみられるが、東西端部は倒木などによる崩落や埋没が著しいため、中央部付近の約 5.5m 分を図化した。築石下部は埋没している可能性が高いが、現況での高さは約 2.0m を測る。築石は一辺 30～80 cm 程度の直方体に近い石材を、ほぼ垂直に積み上げる。概ね横目地を揃え、間詰に小ぶりの自然石を詰めて噛み合わせている。石垣①と同様に、築石前面は平坦な面が良く揃う。

石垣③は、平坦面や通路が複雑に連なる寺坊跡群の一部にあり、北西部を石垣③で、対面する南東部を土塁で画された通路部分に築かれたものを抽出した。このあたりは倒木や崩落が著しく、残存状況が比較的良好である箇所約 5.5m 分を図化した。高さは約 1.1m 程度で上段の寺坊跡へと続く。築石は一辺 30～50cm 程度の直方体に近い石材をほぼ垂直に積み上げる。抽出した部分はわずかな区間であるが、横目地は概ね揃う。

石垣④は、遺跡内で最も広い平坦面を持つ本堂跡と推測されている部分に築かれた石垣である。石段を伴う参道から本堂跡へと向かう右側（北東側）の部分抽出した。参道沿い付近は樹木が繁茂しているため、北東角部までの約 12.7m 分を図化した（石垣④ - A）。また、石垣④ - A の北東は平坦面が張り出す部分となり、石垣も L 字状に折れる。この部分を石垣④ - B として、残存している約 2.6m 分を図化した。石垣④ - A は概ね 1.0m 程度の高さで、緩い法勾配をもって積み上げられる。横目地を概ね揃えることを意識していたとみられるが、広い視点で見ると凹凸を為してやや乱れる。一方の石垣④ - B は張り出し部分の天端石が流失している可能性もあるが、斜面地形に沿って、石垣④ - A と同じく 1.0m 程度の高さで石垣が残存している。石材は一辺 20～60 cm 程度の直方体に近いものを主に用いる。間詰石に小ぶりの自然石を噛ませている部分もあるが、築石であるか間詰石であるかが曖昧な状況である。石垣④ - B はわずかな長さであるが、傾斜する地形に影響されながらも石材は横目地を揃えて水平となるように意識して積み上げていたとみられる。また、築石の背面部分が一部露出しており、土中に拳大程度の自然石は含まれているが、裏込石を大量に込めている状況ではないと判断される。

ダンダ坊では、遺跡のほぼ全域にわたって多数の石垣が築かれている。その場所に着目すると、主要な通路沿いと斜面を切り盛りして寺坊跡を形成した段差となる部分で多くみられる。粗割された自然石を使用し、横目地を概ね揃



図7 ダンダ坊 石垣位置図

ダンダ坊：石垣①-A



ダンダ坊：石垣①-B

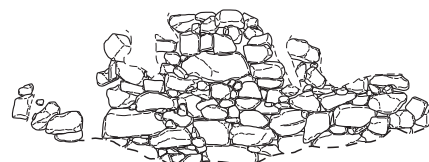


0 (S=1/100) 3m



写真8 ダンダ坊石垣①

ダンダ坊：石垣②



ダンダ坊：石垣③



ダンダ坊：石垣④-A



0 (S=1/100) 3m

ダンダ坊：石垣④-B

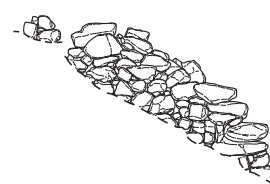


図8 ダンダ坊 石垣略測図



写真9 ダンダ坊石垣②



写真10 ダンダ坊石垣③



写真11 ダンダ坊石垣④

えることを意識していたと推測される。石垣の高さは1m前後となるものが大半であり、石垣④のある本堂跡についても同様である。ところが、北端の庭園遺構にある石垣②は2m前後の高さに積み上げる。出入口となる石垣①についても、櫛形状を呈する平面形態となつて他と異なる様相を呈している。さらに石垣①・②は、他の石垣に比べて築石前面の平坦な面が良く揃い、凹凸が少なく整然と積み上げられている。ダング坊において特別な空間であったことが、石垣の状況からも読み取れる。

なお、遺跡内には矢穴口長辺が5cm程度の矢穴列を穿った母岩がいくつかの地点で存在しているが、構築された石垣に矢穴を持つものは管見の限りでは確認されないことから、山寺に伴う矢穴ではなく、近世・近代以降に石切り場として利用されていた時期のものと考えられる。

(4) 歓喜寺（図9）（5）

歓喜寺の概要

歓喜寺は津市大物に所在し、堂満岳や烏谷山から派生する丘陵の谷部に立地する。創建については『近江国滋賀郡誌』『大物村誌』によると、延暦の頃（782～806）に最澄が建立したと伝わる。弘安3年（1280）の裏書をもつ『近江国比良荘絵図』にも記載される。『葛川明王院文書』には、葛川荘と木戸荘との境相論に関わる史料にその名がみられるほか、正応6年（1293）の史料には歓喜寺の薬師如来像は延暦寺根本中堂から移して安置したものであることや、葛川住人が境を越えて狼藉を行い、歓喜寺の表葺板一千余枚を盗み取ったことなどが記載されている。遺構の状況からも比良山系を代表する寺院のひとつとして栄えていたと考えられるが、永享4年（1432）に寺坊の売券がみえ、15世紀中頃には衰退傾向にあったとみられる。歓喜寺には、並列する寺坊跡を分断する複数の大規模な堀切が築かれていることと、東側に面する尾根上の2つの小ピークに山城を築いていることから、城郭化していた時期があったと考えられている。『近江国滋賀郡誌』『大物村誌』では、元亀争乱による兵火で焼失したとされ、村民が土中から薬師像を見つけたことで文禄元年（1592）に薬師堂が建立されたとする。現在もその薬師堂が法灯を伝えている。

歓喜寺の石垣（図10・写真12～14）

石垣は現在の薬師堂の南西に並ぶ、方形に区画された寺坊跡を中心に築かれ、斜面を切り盛りして形成した寺坊跡の内側や、薬師堂から延びる直線道路に面した部分のやや限定された箇所に残存している。石材は花崗岩とみられ、築石は粗割されたのみの自然石と考えられる。直方体を志向し、平坦面に近い形状のものを前面としている。裏込石や飼石の有無は露頭している部分のみの観察であるため不明である。

このうち、薬師堂の南に位置する寺坊跡の2か所（石垣①・②）、その南の大規模な堀切を挟んだ寺坊跡の外側に1

か所（石垣③）の合計3か所の石垣を抽出した。以下に石垣①～③について述べる。

石垣①は、現在の薬師堂へと延びる直線道路に沿った寺坊跡の内側を形成する部分に築かれたものである。北西端で途切れることからこの部分が出入口となり、ここから約16.5mで露頭する石材が途切れてL字状に折れ曲がる土塁になる。高さは0.5～1.2m程度で、土塁となる南東側が低くなり、石垣を構成する石材も1石のみとなっていく。築石は一辺60～100cm程度の大ぶりの石材が主体となり、多く積み重ねる北西～中央部にかけては拳大程度の間詰石を噛み合わせている。土を盛り上げた土塁に接するように積み上げるためやや緩い法勾配を持つ。大きな石材を並べたのちに間を埋めていったことが推測され、出入口付近の北西部を除いて横目地はやや揃いである。

石垣②は、石垣①に直面する、斜面を削り出した部分に築かれたものである。石垣②の南東端部の天端はスロープ状の通路を兼ね、北西部で石垣が折れ曲がる。南東端部から北西部のコーナー付近の約10.0m分を図化した。石垣の高さは1.2m前後が露頭している。寺坊内の平坦面から犬走り状の段差を設けてその上から石垣が立ち上がるため、視覚的には実際よりも高く感じさせる。この犬走り状の段差については崩落土の可能性もあり、石垣が下方に続いていることも想定される。築石は下部および東西端部付近で、長辺60～100cm程度の横長に近い直方体を呈する石材を主体とし、中央部は一辺20～40cm程度の直方体に近いものを主に用いる。石材に大小のばらつきはあるが、概ね横目地を揃え、間詰に小ぶりの自然石を詰めて噛み合わせている。斜面を削り出した部分に積み上げるため、緩い法勾配をもつ。石垣①とは同一寺坊内の直面する位置関係にあるが、築石の規模に差異が認められる。

石垣③は、直線道路に面する部分に築かれたもので、南東部で石段を有する出入口に接してL字状に折れ曲がることで隅角部を形成する。この隅角部から南西方向（石垣③-A）に約1.9m、隅角部から北西方向（石垣③-B）に約6.5m分を図化した。露頭している石垣の高さは1.2～1.5m程度で、やや緩い法勾配をもって積み上げる。築石は隅角部に長辺60～80cm程度の横長の直方体を呈する石材を用いることに対し、北西方向に向かっては一辺40～60cm程度の直方体に近い形状のものが主体となる。歓喜寺の他の石垣に比べて形状の整った石材が多く使用され、横目地を揃えて、築石前面も平坦な面が整然と揃う。また、隅角部は石材の長辺と短辺を交互に積み上げ、「算木積み」の様相を呈する。

歓喜寺の石垣は、直線道路沿いの方形に区画された寺坊の内外に築かれている。また、歓喜寺は元亀争乱の際に焼失し、その後、薬師堂のみが建立されたと伝わる。その伝承が事実とすれば、石垣は元亀争乱以前に築かれたものと推測される。一方で、石垣①・②の様相と石垣③の様相に



图9 歙喜寺 石垣位置图



写真 12 歙喜寺石垣①



写真 13 歙喜寺石垣②



写真 14 歙喜寺石垣③

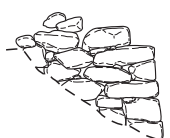
歙喜寺：石垣①



歙喜寺：石垣②



歙喜寺：石垣③-A



歙喜寺：石垣③-B

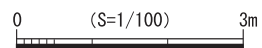
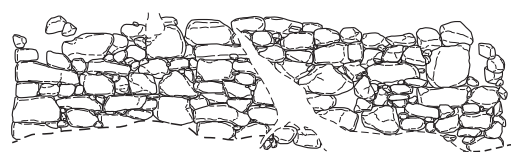


图10 歙喜寺 石垣略测图

は使用石材の形状や積み方などに差異が認められる。この二者は別の寺坊跡であり、且つ寺坊の内と外に築かれたものであるため、構築目的や時期の違いも考慮しておく必要がある。参道となる直線道路に面する石垣③は、積み直し、あるいは後世に新設された可能性もある。

なお、遺跡の南方には、通路沿いや斜面の傾斜に合わせて高い部分では約2～5m以上にわたって石材を積み重ねている箇所がある。これらは割り出した石材をうまく積み上げ、一見すると石垣のように見える部分もあるが、先述した石垣の様相とは大きく異なる。これらの石材には矢穴口長辺が5cm程度の矢穴列が残るものがあり、間詰石や裏込石はなく、その場に運んだ石材の中で極力隙間なく積み上げた状況が推測される。また、薬師堂に直面する平坦面や斜面地には、石材を集積している箇所や矢穴列のある母岩が残っている。これらはダング坊の事例と同様に、近世・近代以降の石切り場に伴うものと考えられ、遺跡の南方で積み上げられた石材は通路や斜面の土留めであるとともに、出荷前の石材のストック場所となっていたと推測される。

4. 石垣の構築時期と機能

ここまで各山寺の概要とともに、資料化した石垣について、個別の観察結果や所見をでき得る限り詳述してきた。本章ではそれらを踏まえ、石垣の構築時期や設置された目的について考えたい。

まず、各山寺の消長を改めて整理し、石垣が構築された時期について考えておきたい。創建期の様相については伝承によるもので判然としないが、聖徳太子の創建と伝える太山寺を除いて、いずれも9世紀半ば～後葉頃に建立したとされる。その後、中世には延暦寺の傘下として発展し、寺院規模を肥大化させていったとみられるが、複数の山寺で寺坊の売券がみられるように、比良山系の山寺の多くが15世紀後半頃には衰退傾向にあったことは間違いないと考えられる。

長法寺やダング坊は寺院としての遺構に後世の改変を受けているとは考え難いことと、その後の堂宇などの再建がなされていないことから、15世紀後半以降にそのまま廃寺となっていたと推測される。太山寺や歓喜寺については寺坊間を分断する堀切が設けられるなど城郭化した時期があるが、本格的に城郭遺構を備える必要に迫られる契機となるのは、やはり織田信長が近江に侵出する元亀争乱の頃と考えられる。後世に著された地誌が示すように、実際に信長によって焼き討ちを受けたかは定かではないが、この段階で寺院としては廃寺に近い状態となっていたとみられ、その後は小規模な堂宇のみが存続、あるいは再建されている程度の状況である。また、ダング坊と歓喜寺は、近世・近代以降に石切り場となっているが、この段階で寺院の石垣を築くとは考えられない。石垣の構築には多大な労力が必要となることから、衰退傾向にある渦中であえて石垣を

築くことには疑問が残る。各山寺における石垣の様相にも少なからず差異が認められ、すべてが同時多発的に構築されたとは考え難いことから時期幅は考慮しておかなければならないが、中心となる時期はやはり寺院が繁栄していた15世紀半ば前後であったと考えておきたい(6)。

続いて寺院に石垣を設置する目的について考えたい。石垣が築かれている場所に着目すると、長法寺では本堂跡から参道として延びる直線道路とそれに並行するもうひとつの直線道路沿いを主とし、やや限定的な範囲であるが、斜面を切り盛りして寺坊を形成する部分にも築かれている。太山寺では本堂基壇を除いて、斜面を削平して形成した寺坊間の段差部分の1か所にのみ築かれている。ダング坊は遺跡のほぼ全域に分布しているが、主要参道となる直線道路とそこから分岐する通路沿い、および斜面を切り盛りして寺坊を形成する部分に築かれる。歓喜寺は直線道路沿いの一部と、斜面を切り盛りして寺坊を形成した部分的な箇所でも築かれる。以上から石垣が築かれている場所は、参道となる主要道路沿いと斜面地形を切り盛りして形成した部分に集約できる。斜面地形を切り盛りすれば、風雨によって土砂が流出していくことは容易に想定され、石垣が土留めとして実用的な機能を果たしたことが考えられる。しかし、遺跡の全域に石垣が分布するダング坊は特異な事例となるが、これを除いて実際に石垣が築かれているのは限定的な範囲に留まり、斜面や壁面の土留めとしての機能は必ずしも必要なものではなかったといえる。石垣の構築には多大な労力が必要であり、石垣を有する寺坊とは、参道となる主要道路沿いに明瞭な区画を伴って築かれた、寺院内で重要視される高い立場の寺坊であったと理解すべきであろう。では、主要道路沿いに築かれた石垣はどうであろうか。主要道路は参道となるものであり、本堂などの中心施設などへと至るために通過する、いわば「顔」と言っても過言ではない。寺坊での石垣と同様に、土留めなどの実用面のみを目的として設置されたものではなく、寺坊や道路沿いの石垣は、むしろ参詣者に威容を示して寺院を荘厳する装置として築かれたと考えられる。

5. 比良山系の主要山寺が果たした役割

それでは石垣を築いて寺院を荘厳する比良山系の山寺とはどのような性格の寺院であったのか、さらに踏み込んで検討を進めたい。

本稿で検討対象とした4寺は、その規模からみても比良山系を代表する主要な山寺である。改めてフィールドとなっている比良山系を概観すると、古くから畿内を取り巻く清浄な山々の中で修験に相応しい霊山とされ、比叡山や伊吹山とともに承和3年(836)に七高山のひとつに勅定されている。主稜線は北に向かってY字状に分岐し、武奈ヶ岳(標高1214m)を最高峰とする標高1000m級の山々が屹立する。Y字に分かれた山系の北方はそれぞれ標高400m

前後となり、対する南端は広大な台地状の地形となつて標高も 200～400m 前後となる。この稜線上には阿弥陀山、釈迦岳、堂満岳、蓬莱山、権現山、霊仙山といった宗教色の強い名称をもつ山々が続くことから霊山であることを示している。比良山系では 9 世紀中頃までに元興寺僧の静安が籠山して南都法相宗系の山林修行の場となり、続いて 10 世紀後半頃からは天台宗勢力が進出したことが知られる（7）。

比良山中には、元興寺僧の静安によって建立された最勝寺と妙法寺という寺院が、承和 9 年（842）までに存在していたことが『続日本後紀』などの文献史料上に記載されている。その内容は、近江国の妙法寺と最勝寺で妙法蓮華經と金光明最勝王經の暗誦をそれぞれ修練させ、これに及第した者を毎年一人得度させるというものである。比良山系の南端に位置する大津市栗原の付近には、現行の地名に「西正寺野」と、そこから谷を隔てたところに「大教寺野」という字名が残っている。「西正寺野」が最勝寺の遺称地とみられるが、「大教寺野」については『近江輿地誌略』に小字名として「最勝寺野」と「大教寺野」の二つの寺院名を冠する地名が記載されており、現行地名と一致しない。しかし、「大教寺野」には大教寺野遺跡として周知される寺院遺跡があり、これが妙法寺あるいは最勝寺の遺跡と推測されている（8）。

大教寺野遺跡は、広い台地上の地形となる比良山系南端部に位置し、霊仙山の南東麓にあたる。現地は造成や道路などによって失われている部分が多いが、基壇を伴う礎石建物と、その前面にも礎石建物が部分的に残る。周辺には明確ではないものの、複数の平坦面が認められる（9）。付近からは 9 世紀半ば～10 世紀初頭の土師器や緑釉陶器が採集されていることから、この時期に寺院が存在していたことは確実である。また、基壇の断面からは「霊山」と墨書された灰釉陶器が出土しており、まさしく背後の山が霊山として認識されていたことを裏付けている。現地に残る遺構から、本稿で取り上げている 4 寺のように、その後は肥大化していく展開を迎えることなく廃絶していたとみられるが、ここが初期の山林修行の拠点のひとつとして機能していた可能性が極めて高い。

山林修行の拠点という点から、もう一つ欠くことができないのが葛川明王院である。葛川明王院は大津市葛川坊村町に所在し、比良山系中央部付近の西麓に位置する。比叡山の千日回峰行の祖とされる相応和尚によって開基され、天台修験の道場として現在もその伝統が引き継がれている。

これらを踏まえて改めて山寺の位置をみると、北西端には阿弥陀山を背負う太山寺が、北東端には長法寺が、中央部では釈迦岳や堂満岳を背後としてダンダ坊や歓喜寺

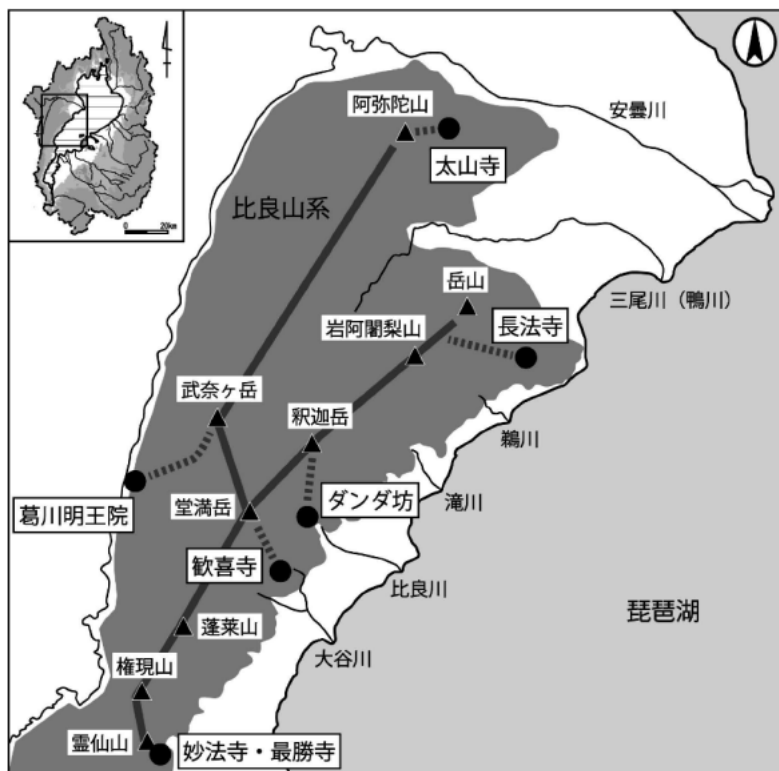


図 11 比良山系の山寺と主稜線

が、武奈ヶ岳の南西麓には葛川明王院が、南端には霊仙山を背負う妙法寺・最勝寺が立地している（図 11）。これらは比良山系の主稜線上の霊山を縦走し、南端・中央・北端の主稜線を降った位置で主要な山寺が配置されている。南端の妙法寺や最勝寺は平安時代後期以降の状況が明らかではないが、中世という時代を通して、これらの寺院が「行場」へと至る拠点となつて比良山系を回峰するネットワークが存在していたことが推測される。そして、修行者を回峰行に導く禅定道の起点を荘厳する装置のひとつとして、拠点寺院に石垣が構築されていたと考えられる。

6. おわりに

本稿は今後崩落していく可能性のある山寺の石垣の資料化と、そこから見出される比良山系の主要な山寺の役割や性格を検討することを大きな目的とした。その結果、石垣について資料化できたのは数あるうちのわずか一部のみであるが、これまで図面としての記録化がなされていない状況からすると、石垣の傾向を把握する端緒をつかむことができたと考える。実際の資料化作業時は試行錯誤の繰り返しであったため、多大な労力と時間を費やしたが、今後も継続して資料化を進めていきたい。

また、回峰ネットワークを想定したが、実際に主稜線の縦走が可能か踏査を行う必要があり、核心となる回峰や山林修行のあり方については十分な検討ができていない。特に葛川明王院については現在も続く著名な天台修験の道場であるにもかかわらず、筆者の力量不足のため本堂周辺以

外での踏査や多分野にわたる諸資料の検討はできていないため、今後の課題のひとつである。多くの課題や抜け落ちている検証視点が山積しているが、地道に検討を進めていきたい。

〔謝辞〕

石垣の資料化にあたり、神保忠宏氏には photoscan の使用方法や神保氏自身の経験に基づく撮影時の注意点などをご教示いただいた。現地の踏査には山口誠司氏・佐藤巧庸氏にも同行いただいた。また、石垣に着目するきっかけとなったのは、以前筆者が担当した発掘調査中に北垣聰一郎氏とお会いし、その後も多大なご教示を頂いたからである。比良山系での回峰ネットワークの着想については、かつて山本義孝氏と数度にわたって近江各所の山寺の踏査に同行してご教示を得たことによるもので、その視点は山本氏に拠るところが大きい。末筆ながら厚く御礼を申し上げます。

註

- （1）長法寺の詳細については小林（2013）を参照されたい。
- （2）石垣に用いられる石材は、直方体に近い平坦面を持つものも多く、母岩から割り出した割石の可能性が高いが、一部の例外を除いて基本的に矢穴痕は認められない。斫りなどの加工は施さない粗割の状態、自然面を多く残すことから、本稿ではそれらも自然石として記述する。
- （3）太山寺の詳細については小林（2015）を参照されたい。
- （4）ダンド坊の詳細については藤岡（2011）で沿革や構造について検討がなされている。
- （5）歓喜寺の詳細については小林（2012）を参照されたい。なお、本稿の内容に直接関連はないが、城郭談話会編（2018）の「歓喜寺城・歓喜寺山城」において、山城部分を再踏査して改めて作図した図面を公表しているため、この場を借りて訂正を兼ねて紹介しておきたい。
- （6）北垣聰一郎氏は本稿で抽出した長法寺の石垣④について、「16世紀前半頃の技能者、穴太の技術」と評価している（北垣 2016）。寺院が存続した下限が明確なものでないため、北垣氏の言う16世紀前半頃の構築を完全に否定するものではないが、15世紀後半頃には衰退傾向にあり、その後の動向からも中興したとは考え難いことから、現時点では衰退に至るまでの繁栄期に近い段階として15世紀半ば前後としておきたい。
- （7）志賀町史編集委員会編（1996）や志賀町教育委員会（2004）などで文献史料上にみられる動向が整理されている。
- （8）志賀町史編集委員会編（1996）で指摘がある。
- （9）図化はしていないが、踏査により確認している。

文献（著者名・刊行機関名 50 音順、刊行年順）

宇野健一（註訂）（1976）『新註 近江輿地志略 全』弘文堂書店
 宇野健一（註訂）（1979）『近江國滋賀郡誌 全』弘文堂書店
 北垣聰一郎（1987）『石垣普請』法政大学出版

北垣聰一郎（2016）「城郭石垣の構造的変遷と釜山近郊の倭城石垣 - 石積み技能者「穴太」の技能を中心に - 」「『釜山城郭』釜山博物館学術研究叢書第 51 集 釜山博物館
 元興寺文化財研究所（1980）『比良山系における山岳宗教の調査報告書』
 小林裕季（2012）「比良山系の山寺 - 大津市歓喜寺遺跡について - 」「『紀要』第 25 号 財団法人滋賀県文化財保護協会
 小林裕季（2013）「比良山系の山寺（2） - 高島市長法寺遺跡について - 」「『紀要』第 26 号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
 小林裕季（2014）「湖西地域における山寺の城郭化」『紀要』第 27 号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
 小林裕季（2015）「比良山系の山寺（3） - 高島市太山寺遺跡について - 」「『紀要』第 28 号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
 滋賀県高島郡教育会（1927）『増補 高島郡誌 全』（1972 再刊）
 志賀町教育委員会（2004）『比良三千坊関連遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』
 志賀町史編集委員会編（1996）『志賀町史』第一巻
 志賀町史編集委員会編（1999）『志賀町史』第二巻
 志賀町史編集委員会編（2004）『志賀町史』第四巻
 城郭談話会編（2018）『図解 近畿の城郭Ⅴ』戎祥光出版
 中井均（2019）「はじめに - 問題提起にかえて - 」「『戦国時代における石垣技術の考古学的研究』（織豊期城郭研究会 2019 年度彦根研究集会資料集）
 福永清治（2007）「寺院における石垣技術の変遷を追う - 近江湖東・湖南地区を中心に - 」「『忘れられた霊場をさぐる』2 栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市文化体育振興事業団
 藤岡英礼（2011）「「山寺」遺構の構造と解釈」『琵琶湖と地域文化 - 林博通先生退任記念論集』サンライズ出版
 森岡秀人・藤川祐作（2008）「矢穴の型式学」『古代学研究 - 森浩一先生傘壽記念論文集 - 』180 古代学研究会

挿図典拠

図 1 国土地理院 1/25,000 地形図「饗庭野」・「今津」・「北小松」・「勝野」・「比良山」・「沖島」に拠り、小林作成
 図 2・3 小林作図
 図 4 小林採拓
 図 5～6 小林作図
 図 7 藤岡英礼氏踏査・作図図面に加筆
 図 8～10 小林作図
 図 11 小林作成
 写真 1～14 小林撮影

（こばやし ゆうき：調査課 主任技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages